思い出の場所から
ふりかえる80年

小田原市に住んでいる人、小田原市を訪れたことがある人。みなさんには小田原でどのような思い出がありますか？

ここからは、小田原市誕生から現在までの80年を小田原駅、小田原城、こども遊園地・動物園、市役所、図書館の移り変わりからふりかえります。

ODAWARA CITY 80th ANNIVERSARY

小田原駅

小田原市の玄関口として2020（令和2）年10月21日に開業100周年を迎えた小田原駅。開業したのは1920（大正9）年で、3年後の関東大震災では大きな被害を受けますが、復旧し、その後は県西部の交通の拠点として発展してきました。

市制施行頃の小田原駅東口
1940（昭和15）年頃

1934（昭和9）年に丹那トンネルが開通し、国府津から小田原、熱海を通って沼津へと抜ける現在の東海道本線が開通し、東海道本線の主要駅のひとつとなりました。1964（昭和39）年には東海道新幹線の停車駅となり、小田原駅西口広場も整備されました。

小田原地下街が整備される以前の駅前
1968（昭和43）年

駅の利用者と車の乗り入れが増加し、人と車が入り乱れて混雑している様子がわかります。

東口広場の整備が完成
1976（昭和51）年

利用者と車が増加し、バス乗降の安全確保と交通の混雑緩和のため、東口広場が整備されました。

東口広場の下に完成した地下街
昭和50年代

東口広場の整備にともない地下街に「アミーおだちか」が開店。当時、67店舗が並んでいました。

小田原駅東西自由連絡通路アークロード開通
2003（平成15）年

アークロード開通以前の小田原駅には、5つの鉄道（JR東日本・JR東海・小田急電鉄・伊豆箱根鉄道・箱根登山鉄道）が乗り入れ、駅の東西が分断されていました。そのため、駅の西口から東口へ行くためには大きく迂回しなければならず、とても不便でした。そこで、小田原駅の利便性を高め、さらに富士箱根伊豆にまたがる広域交流の拠点となるよう整備されたのがアークロードです。アークロードにより小田原駅の東西を自由に行き来できるようになりました。

現在の小田原駅周辺
2020（令和2）年

アークロード開通以降、2004（平成16）年に西口広場、2005（平成17）年に駅ビルが完成し小田原ラスカ（現：ラスカ小田原）がオープン、2006（平成18）年に東口広場が再整備され、現在の姿になりました。2014（平成26）年には小田原地下街が「ハルネ小田原」としてリニューアルオープン、2015（平成27）年には隣接施設として、おだわら市民交流センターUMECOが駐車場施設とともにオープンしました。そして2020（令和2）年12月には、商業施設や宿泊施設、公共施設など、さまざまな機能をもった広域交流施設ミナカ小田原がグランドオープン。小田原駅と駅周辺は、これからも進化を続けることでしょう。

小田原城

現在、多くの観光客でにぎわい、市民からも親しまれている小田原城。1870（明治3）年の廃城以来、さまざまな土地利用がされてきました。近年の史跡整備により、江戸時代の姿へと復元が進んでいますが、市制施行時は、現在とは大きく異なっていました。

隅櫓とお堀端通り　1940（昭和15）年頃

1923（大正12）年の関東大震災で大きな被害を受けた小田原城には、昭和初期に学校や公園が設けられました。写真は市制施行当時の小田原城隅櫓一帯を撮影したものです。写真左端から県立小田原高等女学校（後の県立小田原城内高校）と第二尋常高等小学校（後の城内小学校）の校舎、写真中央には学橋が写っています。

ウメ子を見下ろす天守台の観覧車
1958（昭和33）年

1950（昭和25）年、小田原こども文化博覧会の開催により、城内にはこども遊園地・動物園が開園しました。写真（左）は本丸広場の様子で、左奥に観覧車が設置された天守台があり、手前にはゾウのウメ子が写っています。写真（右）は当時と同じ場所から撮影した現在の本丸広場です。

空から見た小田原城　1958（昭和33）年頃

小田原城の航空写真です。写真左上には天守台と観覧車、写真中央手前には県立小田原城内高校、その奥に市立城内小学校が見え、現在の御用米曲輪には1949（昭和24）年に設けられた城内野球場が写っています。現在と比べると城内にはさまざまな施設が建てられていたことがわかります。

建設中の小田原城天守閣
1960（昭和35）年

関東大震災により天守台の石垣は崩落し、長らくそのままとなっていましたが、小田原こども文化博覧会の開催が決定すると、崩落した石垣がそのままではと、町内会で自発的に始めた募金（天守閣石一積運動）がきっかけとなり、1953（昭和28）年に天守台の石垣復旧工事が完成しました。その後、天守閣を観光資源として注目した商工会議所が促進会を発足させ、市民の長年の夢であった天守閣復興が実現しました。この時も市民による「小田原城天守閣復興瓦一枚運動」が行われ、寄付金が集まりました。

完成した常盤木門と小田原城天守閣

1970（昭和45）年に市制施行30周年を迎えた小田原市は、記念事業として、常盤木門の木造再建に取り組み、1971（昭和46）年に完成しました。常盤木門は現在、刀剣・甲冑等を展示しているSAMURAI館として利用されています。

整備が進む小田原城

小田原城は1938（昭和13）年と1959（昭和34）年に国の史跡に指定され（以降、順次追加指定）、近年は、江戸時代の姿へと復元するため整備を進めています。この動きは、1976（昭和51）年に城内にあった市役所庁舎が荻窪に移転すると、より本格化していきます。1990（平成2）年に住吉橋、1998（平成10）年に銅門（写真上）、2009（平成21）年に馬出門（写真下）、2011（平成23）年には馬屋曲輪を整備し、2010（平成22）年度からは御用米曲輪修景整備事業を開始しました。

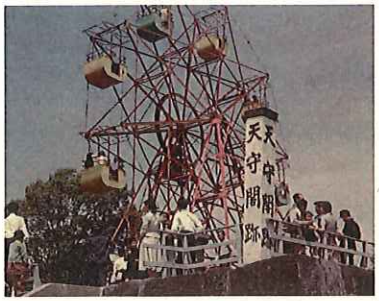
1960（昭和35）年に再建された天守閣も老朽化が問題となり、耐震改修等工事を行い、2016（平成28）年に常設展示も含めてリニューアルオープンしました。これからも小田原市のシンボルとして整備・活用を進めていきます。

小田原城址公園　こども遊園地と動物園

休日になると家族連れてにぎわう、こども遊園地。ゾウのウメ子が暮らしていた動物園。こども遊園地と動物園の開設は、1950（昭和25）年の市制施行10周年を記念して開催された、小田原こども文化博覧会にともなうものでした。

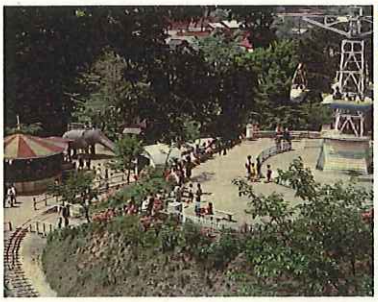
小田原こども文化博覧会の宣伝カー
1950（昭和25）年

1950（昭和25）年頃は、敗戦からの復興期でした。市長の鈴木十郎氏（写真左端の人物）は、将来をになう子どもたちに夢と希望を与え、社会が子どもに関心をもてるように、という強い意向から博覧会を開催しました。本丸広場には、文化館、産業館、観光館、アメリカ児童館、ゆうびん・でんしん・でんわ館などの展示施設が建てられました。また、野外劇場も設けられ、のど自慢大会・人形劇・ハーモニカ演奏会等のイベントが連日開催されました。その他に、本丸広場に動物園、天守台裏の高台を中心とした一帯にはこども遊園地が設けられました。



天守台の観覧車
1956（昭和31）年頃

天守台の観覧車を写したものです。「天守閣跡」という標柱が見え、その奥に観覧車が写されています。観覧車の躯体とゴンドラがカラフルに塗られていたことがわかります。



こども遊園地　1956（昭和31）年頃

写真左側にはメリーゴーランドや象の滑り台、豆汽車の線路、写真右側の高台の上には飛行塔が見えます。写真右は、当時と同じ場所から撮影した現在のこども遊園地です。豆汽車とその線路が現在も残っていることがわかります。

ターザンとゾウのウメ子　1950（昭和25）年

小田原こども文化博覧会開催時に開園した動物園では、開園当時、ゾウ・クマ・タヌキ・キツネ・サル・ワニ・クジャク・水鳥・ヤギ等が飼育され、博覧会後も1951（昭和26）~1959（昭和34）年にかけてヒグマ・アシカ・ライオンが寄贈され、動物園の規模は拡大していきました。動物の中でも特に人気があったのはタイから購入したゾウのウメ子でした。ウメ子の名前は子どもから募集し名付けられました。

みなに親しまれたウメ子は2009（平成21）年に亡くなりました。推定年齢62歳の大往生でした。写真は、森永製菓がスポンサーとなった「森永デー」の時の様子で、ミルクキャラメルの宣伝のための、野外劇場での曲芸や奇術ののち、「日本ターザン」が登場しました。

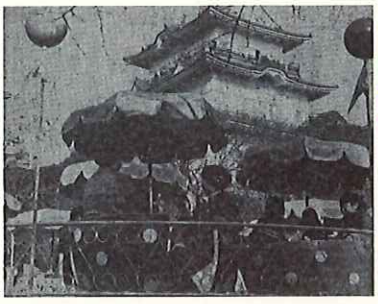
小田原動物園のクマ　1950年代

小田原こども文化博覧会開催時には4頭のクマが飼育されていました。1951（昭和26）年には神奈川県からヒグマが寄贈され、1950年代には5頭のクマが飼育されていました。

水呑所に集う子どもたち　1958（昭和33）年頃

天守台の下に設けられた水呑所に集う子どもたちの様子が写されています。水呑所は、ウメ子購入に尽力された西村楽天氏を顕彰する会から寄贈されました。水呑所には、ウメ子を写した柏木保平氏制作のブロンズ製のレリーフが埋めこまれており、現在は形を変え、ウメ子の説明とともに「本丸跡」の説明板の台座に移設されています。小田原こども文化博覧会終了後も子どもたちの憩いの場として、こども遊園地と動物園が親しまれていたことが伝わってきます。

近年、史跡整備の一環で、こども遊園地・動物園の規模は年々縮小されていますが、これからも市民や観光客に愛され続けられるよう、小田原城址公園の整備を進めていきます。



メリーカップを紹介する「広報おだわら」　1971（昭和46）年2月1日

1971（昭和46）年にメリーゴーランド（市報では回転木馬）に代わってメリーカップが登場しました。このメリーカップは、その後多くの観光客や市民に親しまれましたが、老朽化にともない、2017（平成29）年11月に撤去されました。そのうちの1基は、2018（平成30）年に駅前おしゃれ横丁商店会に移設されました（写真右）。

小田原市役所

小田原市荻窪にある小田原市役所。市制施行時の庁舎は小田原城三の丸（現在の横浜地方検察庁付近）にありました。
戦後、周辺の町村と合併し、市域や人口は大きく拡大しました。

小田原町役場
1940（昭和15）年頃

小田原町役場として震災後の1929（昭和4）年に新築され、市制施行後は市役所として1962（昭和37）年まで利用されました（写真左）。

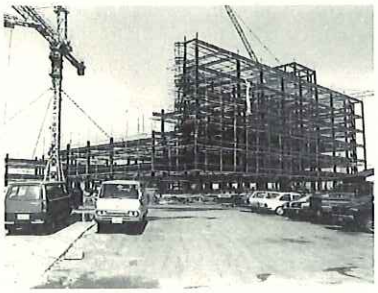
当時としては威容を誇る庁舎でした。建物の周りにある低い石垣は現在も小田原市役所当時のまま残っています（写真右）。

市役所庁舎の移転
1962（昭和37）年

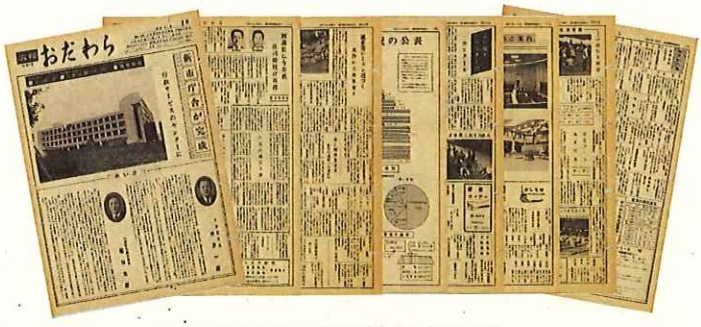
市役所は1962（昭和37）年に小田原城二の丸にあった県立小田原城内高校の旧校舎に移転しました。写真は移転作業の様子で、正面入り口には椅子が積み上げられ、写真右奥ではトラックに荷物を運び入れています。

看板の掲げられた市役所庁舎正門
1962（昭和37）年

1962（昭和37）年から使用していた庁舎は、1929（昭和4）年に県立小田原高等女学校（昭和23年県立小田原女子高校、昭和26年県立小田原城内高校に改称）として建設されたもので、次第に老朽化が目立ちはじめました。また、市勢の伸展に伴う行政需要の増大や、職員の増加と機構の拡大により、建物は手狭になりました。そこで新しい庁舎を荻窪に移転新築することが決まりました。



建設中の市役所庁舎
1975（昭和50）年



広報おだわら　1976（昭和51）年7月号

1976（昭和51）年7月号の『広報おだわら』では、新庁舎の完成を大きく取り上げました。中井市長のあいさつには「新庁舎は、新しい時代にふさわしい行政サービスセンターとして市民のみなさんの利便と行政能率の機能を十分に盛り込んだ」とし、「市民福祉の向上と、行政運営の高率化」に全力で取り組む決意が表明されています。また、新庁舎の完成を機に、本市が格調高い文化都市としてますます発展するよう市民憲章が制定されました。

新庁舎も建築から2020（令和2）年で44年が経過し、2014（平成26）年から庁舎の耐震改修工事が行われました。これからも市民に行政サービスを提供する拠点として機能し続けます。

完成した市役所庁舎　1976（昭和51）年

新しい庁舎は、事務能率の向上が可能な中枢的行政センターとして荻窪に1974（昭和49）年から建設が始まり、1976（昭和51）年に完成しました（写真上）。写真（下）は同じ場所から撮影した現在の市役所です。1995（平成7）年度に前庭に植栽し、木道を整備しました。

小田原市立図書館

2020（令和2）年3月末に長年の役目を終え閉館した市立図書館（星崎記念館）。
その建設は1959（昭和34）年と今から61年前にさかのぼります。市立図書館の今日までのあゆみをふりかえります。

小田原町図書館
1940（昭和15）年頃

1933（昭和8）年に小田原町図書館として建設され、市制施行後は「小田原市図書館」と改称されました。この建物は現在、小田原城二の丸観光案内所として使用されています。

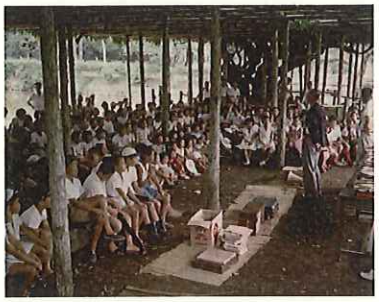
小田原市図書館の移転
1954（昭和29）年

蔵書数・利用者の増加により、現在の市民会館大ホールの所にあった旧新名女子高等学校の校舎を市が購入し、1954（昭和29）年に移転しました。これに伴い、視聴覚資料室・小劇場・児童室・公開書架室が新設されました。

開館時の星崎記念館外観　1959（昭和34）年

アメリカ移民で成功した市内矢作出身の星崎定五郎氏は、幼少期は貧しさのために思うように勉強ができなかった経験から、「子どもが誰でも自由に勉強したり、楽しんだりできるように」との願いから5万ドル（当時の日本円で約1800万円）の寄附を申し込まれ、この寄附金を基に、児童文化館と市立図書館を併設した建物が小田原城址公園内に1959（昭和34）年に完成しました（写真左）。建物は定五郎氏の姓を冠して「星崎記念館」と名づけられました。

写真からは開館当時、お堀側の木々は少なく、建物外観がよく見えていたことが分かります。写真（右）は当時と同じく、お堀側から見た現在の旧市立図書館の建物です。木々の隙間から白い建物がわずかに見えます。



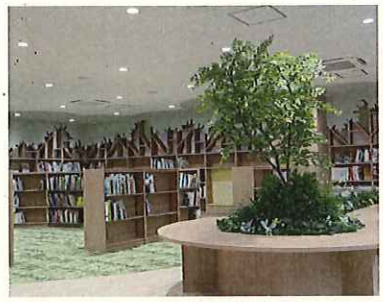
こども緑蔭図書館の様子
1950年代

児童文化館の主要行事のひとつで、1951（昭和26）年度から1981（昭和56）年度まで継続されました。毎年、夏休みの期間に、図書をつんだ自動車が市内を巡回する行事です。開設場所は、市内の寺院、神社などの木陰（緑蔭）が選ばれ、本を手渡された子どもたちが木陰で読書する姿が市内各所で見られるようになりました。写真は藤棚下で行われている様子です。

児童室の様子
昭和30年代

新築された星崎記念館は、「児童福祉センターと図書館」建設のためという星崎氏の意向から、児童のための施設を特別に位置づけ、児童室に相当する部分を「児童文化館」として「図書館」とは区別しました。児童文化館には、こども科学室、こどもクラブ室、小劇場、視聴覚資料室が設置され、児童向けにさまざまな行事が実施されました。

小田原駅東口図書館開館
2020（令和2）年

老朽化に伴い閉館した星崎記念館。その役割と思いは、広域交流施設ミナカ小田原内に開館した小田原駅東口図書館（写真左）とおだびよ子育て支援センター（写真右）に引き継がれています。

小田原市の図書館は、「人々が学び、集う施設でありたい」という変わらぬ思いとともに、中央図書館（かもめ図書館）と東口図書館の新体制で始まりました。